

檜山陸郎『哥薩克』論

一「満洲国」に求められた「新しいコサック」一

江 迅

はじめに

『哥薩克』は檜山陸郎による長篇書き下ろし小説で、1943年10月に単行本として新太陽社¹⁾から出版された。2001年には『日本植民地文学精選集026・満洲編12・哥薩克』という復刻版がある。

作品の舞台は、「満洲国」の北西部とソ連の国境に位置する、中国人・白系ロシア人・日本人などさまざまな民族が暮らしていた満洲里という町である。1941年の春から9月にかけて、主人公のアルメニア人の少年アルマイスが、自身のアイデンティティの確立を追い求め、「コサックの子」を経て、最後は「満洲国のための新しいコサック」に帰着するまでの一連の経緯と葛藤を描き、全5章から成っている。12歳のアルマイスはタタール人の父とアルメニア人の母を持つ混血児である。幼い時に両親を失い、ヴァレンチーラ夫人の養子となった。夫人もアルメニア人で、約20年前に民族紛争の難を逃れ、一人で満洲に渡り、満洲里の町で小さなホテルを経営している。ある日、夫人は生き別れの夫ヴァシリイの消息を知り、彼を満洲里に呼び寄せる。アルマイスは期待を胸に養父を駅に出迎えたが、大柄な養父から重圧を感じる。その後、アルマイスは実父セルゲイが反革命のコサックだったことを知り、ヴァシリイに反発するようになる。養父母や町の白系ロシア人たちの間にはさまざまな軋轢がある一方、山田さんや明さんなど、町の日本人たちからは不思議な結束力を感じる。このコントラストから覚える「耐えられない焦燥」に駆られ、アルマイスはしばらく自暴自棄になった。そこで一時帰国した明さんから、宮城や靖国神社を巡った感想の手紙が届き、「明るく暖い光を与へ」られたと感じる。そのような中で、アルマイスはコサックの仲間からコサックの生き方や誇りなどについて勉強し始め、しまいにはソ連に攻め入り「哥薩克の国」を作ることまで夢見るようになる。しかし、明さんや、学校の白系ロシア人先生に感化され、自分は何よりもまず「満洲国の子供」であり、「満洲国」のために命を捧げなければならない

(2)

と思ひ至る。9月、北満の厳しい自然環境になじめないヴァシリイは再び哈爾濱に戻ることを決意する。召集を受けた山田さんもちょうど同じ日に満洲里を發つ。アルマイスを含めた異民族の見送り人たちは、列車に乗った山田さんの凛々しい姿と、周囲の日本人の並々ならぬ情熱に感動し、言語や民族の壁を超え、一緒になって「万歳！」と叫ぶ。

続いて、作者檜山陸郎の経歴について簡単に触れておく。檜山は1916年6月に台湾で生まれ、小学校3年生の時に東京に移った。1926年にまた朝鮮の小学校に転じ、さらに1年半後、5年生の3学期に北海道札幌市の小学校に転校した。1935年に早稲田大学専門部政経科に入学、大学新聞記者としてしばらく働いたが中退した。コロムビア（日本蓄音機商会）に入社し、コピーライターとして活躍したが、数年後に退社し、当時日本の若者たちの憧憬を掻き立てていたという「満洲国」に行くことにする。朝鮮を経て大陸に入り、奉天（瀋陽）、新京（長春）、哈爾濱、ハイラルを旅し、国境の町満洲里に一年近く過ごした。1941年12月の太平洋戦争勃発を機に東京へ帰り、再びコロムビアへ入社した。その満洲体験を小説化したものとして、長篇小説の『哥薩克』と、文藝春秋社で募集していた「満洲建国」十周年記念の懸賞小説に当選した「鯉魚」²⁾がある。このわずか2、3年間の文学活動を、本人自身は「何れも昭和18年までの青春熱血時代の仕事」と言い切り、戦後はもっぱら音楽業界の仕事に従事していた³⁾。

復刻版の「檜山陸郎『哥薩克』解説」（以下「解説」と略す）において、川村湊は檜山の経歴の特徴について以下のように指摘している。

満洲在住時にも、特に文学関係者と関わりを持った形跡はなく、日本人の「満洲文学」とは、別個のところで満洲についての小説を書いていた存在といえることができる。（中略）彼は台湾、朝鮮、北海道と、日本の植民地、あるいは内国植民地といえる地域を転々としており、まさに「外地」において生れ育った日本人だったといえることができる。こうした「外地」生まれ、育ちということが、檜山陸郎という人物の基本的性格を作り上げた（略）。⁴⁾

川村が述べた通り、幼少期から日本の植民地、つまり「外地」を転々とし、20代前半に満洲に渡り長期滞在した檜山の経歴は、その人物の性格、ひいてはその創作に大きく影響したと言えるだろう。文学活動の期間が短く、かつ数少ない作品には政治的・時局的な色彩が強いためか、檜山陸郎はあまり注目されてこなかった「作

家」と言わざるを得ない。しかし、豊富な「外地」での経験や、題材の珍しさといった面から言えば、彼の作品には興味深いものがある。本論で検討する『哥薩克』はまさしくその一例である。

作品の発表当時、『日本読書新聞』では、「満洲国に於ける哥薩克少年の建国精神への眼覚めを描く書下し長篇」⁵⁾と簡単に紹介されているが、『哥薩克』に関する本格的な先行研究は管見の限りまだない。文学研究でこそないものの、ロシア民族学者の伊賀上菜穂は、本作品を「まさしく当時の「大東亜共栄圏」思想に沿っている」と指摘したが、論は展開されていない⁶⁾。また、前掲の川村の「解説」ではこのような説明がある。

満洲国でも北辺にあたる厳しい自然環境の世界を舞台に、自然と人間、生活と風土を、丹念に描いた、あまり政治性のない文学作品といえるかもしれない。カザックの少年アルマイスの、一種の教養小説ともいえる『哥薩克(カザック)』は、作者の檜山陸郎の少年時代の「外地」体験と、おそらく密接な関わりを持っている。養母のかつての夫や、日本人とアルマイスとの交流は、「外地」の風景や、異民族との関わりとのなかで暮らし、育ってきた檜山陸郎の幼少年時代を反映したものと考えて、そう誤りはないと思われるのである。⁷⁾

満洲里という町の自然と人間を丁寧に描いたこと、及び作者の檜山自身の「外地」体験が本作品と深く関わっていることは確かに、川村の指摘通りだと思われる。だが、果たして本作品は、川村が言うような「あまり政治性のない文学作品」なのか。本論は主人公の少年のアイデンティティ問題に注目し、その変化の過程を時代背景などと照らし合わせながら、作品のテーマと性質を明らかにしたい。

1. アルメニア人から「コサックの子」へ

テキストの分析に入る前に、物語を理解する上でキーワードとなるいくつかの固有名詞について説明しておきたい。タイトルにもあるように、本作において一番重要な用語は「哥薩克」である。彼らは最初、トルコ人やタタール人の山賊や戦士であったが、のち古代ロシア政権の支配を嫌って、辺境のステップ地帯に逃亡する農民の集団を指すようになった。18世紀から20世紀初頭においては徐々に帝政ロシアに組み込まれていき、辺境の防衛など重い軍役奉仕を義務付けられるかわりに、

(4)

一定の自治と特権が認められるようになった。ロシア政府はこれらのコサックを帝政の支柱として、革命運動などを弾圧するのに用いた⁸⁾。強い特権意識と誇りを持ち、騎兵軍団として特に猛威を振るっていた⁹⁾。ロシア革命後、彼らの多くは反革命の白衛軍につき、その敗退とともに中国や朝鮮などに亡命した¹⁰⁾。

「哥薩克」は漢字表記だが、ほかに「コサック」、「カザーク」、或はもともと本作品『哥薩克』のタイトルに付けられた振り仮名の「カザック」など、いく通りかの名称がある。しかし、日本語においては「コサック」の方がもっとも広く用いられているので、本論は引用の際を除き、「コサック」という表記に統一する。また、セルゲイはタタール人出身として設定されている。タタール人とは、西トルキスタンを除く旧ソ連領内のトルコ系住民の行政上の総称で、イスラム教徒が多い¹¹⁾。

次いで、アルメニアとは西南アジアにある、世界で初めてキリスト教を国教とした国である。16～17世紀にトルコに征服され、19世紀には、領土の一部が帝政ロシアの支配下に入った。トルコ領のアルメニア人は19世紀末からいくども大虐殺にさらされた。1917年のロシア革命の後にはソ連の一部となった¹²⁾。宗教などの違いもあり、アルメニア人と支配民族のトルコ人（タタール人）とは複雑な民族問題を抱えている。アルマイスの実母と養父母は何れもアルメニア人である。

最後に、白系ロシア人の定義について簡単に触れておく。1917年の十月革命により、ロシアは大量の難民を生み出した。その多くは革命の後に成立されたソビエト政権を受け入れず、帝政派や「穏健社会主義者」とともに行動をした。さらにソビエト政権に対立する白衛軍を支持し、その敗北後に亡命したものたちもいた。従って、「白系ロシア人」の「白」にはソビエト政権の「赤」と敵対するという意味が含まれている¹³⁾。その意味で、主人公アルマイスの実父セルゲイは典型的な白系ロシア人である。一口「白系ロシア人」と言っても、「実際にはロシア民族、反革命（白系）、移民、亡命という枠組みには収まらない、国籍、民族、信仰、旧身分、出身地、イデオロギー等の多様性と集団間の境界の流動性・相互浸透性を特徴としていた」¹⁴⁾。満洲には数多くの白系ロシア人が移住し、その後の「満洲国」の成立と崩壊を経験してきた。国境の満洲里に雑多な民族が一緒に居住していたのは、こうした背景があるからだ。本論は便宜上、これらのロシア系ディアスポラを広義的に「白系ロシア人」として捉える。

繰り返しになるが、主人公アルマイスの実父セルゲイは反革命のタタール人のコサックで、実母と養母のヴァレンチーラ夫人、そして養母の夫ヴァシリイは皆アルメニア人という設定になっていて、しかも全員亡命者として満洲に流れ着いたので

ある。このような複雑な生い立ちを持つアルマイスが、如何に自分のアイデンティティを確立させるかがこの作品の主なテーマと思われる。アルマイスのアイデンティティの確立過程は主に二つの段階に分けられる。その一つ目が「アルメニア人からコサックへ」である。さらに、「アルメニア人からコサックへ」変貌するにあたり、以下 1.1 と 1.2 に説明するような二つの選択がなされた。

1.1 「父」と「母」の戦い

前述のように、養母のヴァレンチーラ夫人からヴァシリイのことを聞かされて、生まれる前から実父と死別したアルマイスは最初、新しい父親が来ることをひそかに期待している。しかし、そのことは同時に、アルマイスに動揺と困惑をもたらした。

「パパが来る」

それは彼にとつては余りに思ひ掛けない、何と理解してよいのか判断のつかない環境であつた。(中略) 急に心の中に一杯に拡がったこの何か鬱屈する寂しさといはうか、胸に悶えるしこりといはうか、曾つて覚えたことのない妙な胸騒ぎのするのは一体何の故であらう。(40 頁)

このように、小説の序盤から、アルマイスは自分が父親と呼ぶべき人は誰かという問題にぶつかり、物語もこうして展開されてゆく。そして、車で養母と一緒にヴァシリイに会った時は、想像と違ったその逞しさに驚き、「その巨大な掌はアルマイスの頭を鷲掴みにして、若しぐつと力を加へればそのまゝ頭蓋骨は粉微塵に砕けてしまふのではないかとさへ思はれた」(86 頁)。

ヴァシリイから重圧を感じているアルマイスは、なかなか養父のこゝろを受け入れられなかった。その中、アルマイスは実父の友人だった修道僧から、コサックであった本当の父セルゲイのことを知る。少年はますます養父に反発する。この衝突に対し、養母のヴァレンチーラ夫人はあくまでも自分の愛情の力を信じようとするが、ヴァシリイは独自の見解を抱いている。

お前がタタール人になるか、アルマイスがアルメニヤ人になりきるか、どちらかになり切らなければなるまい。まアお前の方は別問題として、アルマイスがタタール人になるか、アルメニヤ人になるかといふことは、要すれば父が勝つか母が勝つかといふ問題なのぢや。しかも彼の胎内に流れる父なる血は勝つべ

(6)

き民族の血ぢや、母なる血は敗れたる者の血ぢやよ。(中略) 敗者につくは難く勝者に参ずるは易いからな。(194～195頁)

ヴァシリイは、実母や養母がアルメニア人だろうと、強者のコサック(実父)の血を受けた以上、アルマイスはやはりコサックの方に靡くはずだと考えている。だから同じくアルメニア人の自分とは、抗えない「宿命」があり、憎み合うことになる。このように、アルマイスのアイデンティティの確立において、ヴァシリイはその父親の血筋の影響力を強調する。しかし、血筋だけがアルマイスがコサックを選ぶ理由ではない。

国境の町だけあって、満洲里は民族のるつぼである。町には「満人国民学校」や「日本人国民学校」のほか、「露西亞人国民学校」もあって、民族的出身の異なる子供たちが通っている。そういう環境のなか、民族はデリケートな問題になりうる。実父がコサックであることを知る前に、アルマイスは自分のことをアルメニア人だと認識している。

それに彼がアルメニヤ人だといふことも、余り学校を楽しく思はせない原因の一つになった。学校には土耳其人や希臘人や猶太人なども一緒に通つてゐたが、その連中とは違つて、アルマイスだけは、どうも露西亞人に対して一目置いてゐた。(中略) アルメニヤ人だといふ意識が離れず本当に露西亞人になりきれない気持を忘れることができない上に「アルメニヤ人は狭いから」といふ爪弾きの合言葉を何かといへばつい気にかけるのであつた。そのやうに学校では何かしら自分が劣等な人種で、皆から除け者になつてゐるのではないか、といふひがみ根生から、彼は学校が好きになれなかつたのだ。(49頁)

ここでいう「本当に露西亞人になりきれない」は、ロシア人をスラヴ族という狭い意味で捉えている。先に触れたように、アルメニアは長い間、トルコとロシアの支配を受けてきた。満洲里の白系ロシア人の社会においても、アルメニア人は被支配民族の地位を脱しえず、そのためアルマイスは劣等感を感じ、民族的差別に苦しめられている。少年の心にはこのような願望が秘めている。

アルメニヤ人だと人から思はれるのが嫌ひで、露西亞人、それもこの土地の多い農夫ではなくて町方の上品な露西亞人だと思はれ度いと強く願ふことがあつ

た。純粹のスラヴ人など殆どゐないのに、学校の連中は大抵我こそはスラヴ人だといふ誇らかな顔をしてアルミスを見下す。彼の望は容易に容れてはくれないのであつた。(50 頁)

アルミスはもともと「上品な露西亞人」に憧れを抱いていた。それは、町の白系ロシア人社会においてロシア人は上位の存在だからである。少年の容姿は実は「上品な露西亞人」と遜色しない。だが「純粹のスラヴ人」ではないため、彼の願いは叶えられない。

そこで、ちょうど修道僧から実父の話が舞い込んだ。最初、「タタール人の哥薩克ときは全く山寨に住む盜賊の哥薩克だ」(108 頁)と、アルミスは町の人たちのコサックに対する恐れと軽蔑が混在する気持ちを思い出し、困惑している。しかし同時に、コサックの勇猛果敢さと神業のような馬術にも思いを馳せ、コサックの子であることが「彼の心に沸々として喜びの情を湧かしめた」(110 頁)と、最終的には受け入れて喜ぶのである。それは、「上品な露西亞人」になれないなら、強いコサックも一つの選択だというアルミス少年の「強者崇拜」的な心理が働いたからだろう。そしてアルミスは、アルメニア人の養父母の前で、「アルメニヤの話など聞き度くないよ。ママ、僕は哥薩克の子なんだから」(180 頁)と明言し、自分のアイデンティティ認識を主張する。

このように、アルミスの中には、多民族の白系ロシア人社会で「劣等な人種」と思われまいように、できるだけ強い側にいたい気持ちがある。物心がつく前に亡くなったコサックの父親の血筋というあやふやな影響より、単にコサックとしての実父が被支配者のアルメニア人の実母より強いから、アルミスは「父」の方に付いたのである。優位に立つために、少年は自ら積極的に強い方を選んだ。ヴァシリイが言う「父」と「母」の戦いは、言い換えればアイミスのアイデンティティの選択である。そして、血筋などよりも、この国境の多民族がにらみ合うような環境の方が、その選択に影響していると読むべきである。

1.2 言語の選択

環境だけではなく、言語の選択もアルミスのアイデンティティの確立において重要な役割を担う。

国境の町満洲里は民族のるつぼであるため、当然ながらさまざまな言語が飛び交う。どういう言語で会話するかは、場合によって特別な意味を持ちうる。「外地」

経験の豊富な作者はその点を見逃さず、作品において言語の問題がしばしば挙げられている。例えば、主人公のアルミス少年は語学の天才として設定され、アルメニア語・ロシア語・日本語・中国語を巧みに使い分けられるという。言語のレパトリーが多い分、その使い分けは意思表示のツールとして有効である。

例えば、養母のヴァレンチーラ夫人はロシア語ができるが、息子と話す時は好んでアルメニア語を使う。従って、アルミスも家ではアルメニア語を話す。ところが、

土耳其人達は、学校では勿論、家庭でも露西亜語ばかり話して、アルミスのやうに自分の民族の言葉を話すやうなことがなかつた。だから彼だけは自分はアルメニア人だといふ意識が離れず本当に露西亜人になりきれない気持ちを忘れることができない。(49頁)

つまり、町の白系ロシア人社会において、あまりに自分の民族の言葉を使うと、白系ロシア人の一員として見なしてくれないようだ。このように、白系ロシア人社会における民族間の格差はロシア語の優位性によって表されている。

加えて、アルミスの中では、アルメニア語とロシア語とはそれぞれ異なる役割を担っている。

彼は昨日来た白熊のパパのことを考へる時や、ママの困惑した顔などを思ひ出して色々考へる時にはアルメニア語で考へてゐるのであつた。それが死んだパパのことや友達のことや怪我した時のことなどを考へる時は何時の間にか露西亜語で考へてゐるのである。(112頁)

このように、アルミスにとって、養父母に関すること、つまり彼のアルメニアの部分だけはアルメニア語で、そのほかの思いや感情、例えば実父や友達、怪我の痛みなどはすべてロシア語で処理することが分かる。

そして、自分が「コサックの子」だと知ってから、アルミスはヴァシリイのことを敵視するようになり、ひそかに「もうこれからアルメニア語などは金輪際使つてやらないぞと心に決めた」(171頁)。しかし、「口惜しいけれど彼の耳には、ヴァシリイの咽喉にからまる力のこもつた、アルメニア語が物恐しく響い」(171頁)で、それに圧倒され思わずアルメニア語を使ってしまった。だが、物語の終盤に近づくと、アルミスは段々コサックとしての自信を持つようになる。ある日、同じコサック

クの仲間たちと「哥薩克の練習」をしている途中、狩りに出てきたヴァシリイと山田さんに遭遇した。山田さんはアルマイスにこう尋ねる。

「ふうん、哥薩克の練習をしてどうしようといふんだい」

「いろいろあるさ。日本語で何と言へばいいかなあ、僕よく判らないよ」

「露西亞語で言つてみな」

「うん」アルマイスは小賢しく瞳を輝かせて露西亞語でゆつくりと喋り始めた。

「(中略) 僕達はザバイカルに哥薩克の国を建ててんだよ、」

「つまらぬことを喋るな」と、その時、何時の間にかアルマイスの背後に回つたヴァシリイは息子の肩をぐいと抑へて厳しくたしなめた。

(中略)「何するんだい。お前なんか知るもんか」と、アルマイスは烈しく反抗的に叫んだ。(307～308頁)

上述の二つの場面はいわばアルマイスとヴァシリイの二人の「対決」であり、そしてここでもまたロシア語対アルメニア語という構図になっている。この二つの場面を比べてみると、アルマイスはアルメニア語を拒絶し、意識的にロシア語を選択し使用していくことが分かる。アルマイスにとって、ロシア語は痛みや喜びなどの感情を表す言語であり、そしてなによりも、自分がコサックであることの意味表示のためのツールだった。このように、言語の選択においても、アルマイスのアルメニア人から「コサックの子」へというアイデンティティの転換を確認できる。

2. 「コサックの子」から「満洲国のための新しいコサック」へ

2.1 「耐えられない焦燥」の由来

こうして、アルマイス少年はアルメニア人から「コサックの子」に変貌を遂げたのだが、まだ「コサックの子」から「満洲国のための新しいコサック」へという第二段階の変化が待っている。

アルマイスが自分は「コサックの子」だと知り、それほど経たないうちに独ソ戦が勃発する。それを機に「満洲国」のコサックが糾合され、故国を奪還するという噂は国境の町満洲里に広まり、それを怖がる町のソ連人は次から次と本国へ引き揚げていく。ある美しいソ連人の女性は満洲里を立つ前に、白系ロシア人の友人のウェーラ夫人に宝石類の売りさばきを頼んでいるところ、偶然ウェーラ夫人の家に

お使いで来たアルマイスに目撃される。アルマイスは困惑して、その引き揚げのわけを尋ねる。すると、ソ連人の女性は「哥薩克が来て私達殺されるかもしれないもの」(212頁)と答える。自分はコサックだと得意げに宣言するアルマイスは、コサックが怖いというソ連人の女性の言葉が痛ましく思い、彼女から目を逸らす。広義的には同じロシア人¹⁵⁾のはずなのに、ソ連人の女性は白系のコサックを警戒している。

だが、同じ白系ロシア人でも、一枚岩というわけではない。ある日、アルマイスは町中で養父母が寄り添って散歩している様子を遠くから見かけ、思わず一目散にその場を離れる。そのことでアルマイスは「耐えられない焦燥」を感じ、さらに考える。

自分達、例へばニーナ、アリョーシャ、ミーシャ、カーチャそれにヴァシリイや七面鳥夫人やウェーラ夫人やリーチャ夫人、さうした自分の周囲の人々が夫々その胸の中に幾つの弾け豆をいつも抱いてみて何かといふとそれがパチンと弾けて一人飛び出してしまふ、そこには何時如何なる場合でも人々をがつしり結び合せる強い紐帯が欠けてゐる。一つの家親子として住みながら、ヴァシリイに対してアルマイス自身がひどい弾け豆だ。また露西亜人国民学校に対してアルマイスやアリョーシャは弾け豆だ。(中略)それは一体どうした訳だらう。(230～231頁)

先に述べた通り、満洲の白系ロシア人は国籍、民族、信仰などの違いにより、その出自はさまざまであった。アルマイスが感じた周りの一体感や帰属意識の希薄さは、白系ロシア人社会の多様性を鑑みれば、リアリティのある描写といえる。

一方、日本人の場合はどうなのか。

純白のカラーが眼に痛くしみるカーキ色の協和服に身を包んだ山田さん、金ボタンをいつもきちんと嵌めた紺サージの学生服を着てゐる明さん。一人は日本人の青年で一人は子供だが、アルマイスはその二人が何かしら或る一つのものにがつちりと結ばれてゐるやうに思はれてならなかつた。(中略)明さんも山田さんも「東京」の話をする時は同じやうに眼を輝かせる。そして同じやうに賞め讃へる。(230～231頁)

アルマイスだけではない。養母のヴァレンチーラ夫人も、明さんが日本に一時帰

国して、また戦争の影響で不穏な状態にある満洲里に戻ってきたことにショックを受け、「少年とはいへ明さんの体の背後にも日本の国の力強い何物かが固く結ばれてゐるのに気がついた」(311頁)という。

日本人の間には「強い紐帯」があり、それに比べ自分の家庭や町の白系ロシア人は明らかに結束力に欠けている。「コサックの子」だと宣言してから、しばしば養父母と衝突したアルミスは身を持ってその結束力の無さを体験した。自分と養父母のすれ違いを含め、周りの白系ロシア人がバラバラだということがアルミスの感じた「焦燥」の根源といえる。

2.2 「父」と「母」の確立

以上のように、アルミスのアイデンティティは一旦変化を遂げたが、養父母のことをどう受け止めるか、またどうすれば白系ロシア人は日本人のように「一つのものにがつちりと結ばれ」られるか、「コサックの子」になったところでこれらの問題はまた残されている。そのため、アルミスはさらに新しいアイデンティティを求めるようになる。その過程では、「父」と「母」はまた問題解決の要となるが、日本人も同時に模範として提示される。

具体的に見ていくと、まず、養母と喧嘩したあと、アルミスのところに明さんからの一時帰国の時に宮城や靖国神社を巡った感想を書いた手紙が届いた。その短い手紙の中で、明さんは主に東京の広さや、先進、発達している様子を簡単に紹介し、そして半分ぐらいの紙幅をさいて東京での行動を記した。

テンノウヘイカノイラツシャル宮城へオマイリニユキマシタ。クレイナ松ヤオホリヤ芝フガアツて、ソレハソレハリツパデシタ。オトウチャンガ、ココハ日本人ノタマシイダヨトイマシタ。(中略)ソレカラボクタチハ、ヤスクニジンジヤニモユキマシタ。(中略)ソレカラボクタチハ、メイジジングウニモユキマシタ。(262～263頁)

「テンノウヘイカ」、「宮城」、「日本人ノタマシイ」、「ヤスクニジンジヤ」など、当時の日本「内地」の国家主義が色濃く表れるこの明さんの手紙は、アルミスの「不安な満されない気持ちに明るく暖い光を与へた」(260頁)。その後は明さんと一層親しくなったという。

さらに、ある日、アルミスは明さんの家に行き、一緒に模型飛行機を組立てる。

アルミスに将来のことを聞かれ、明さんは少年航空兵になると答える。アルミスは自分がロシア人でコサックだから飛行機に乗れないと羨んでいたら、明さんは勉強さえすれば誰でも飛行士になれると励まし、「そしてお国の為に尽す」と言う。

「お国の為に？」

「さうさ。お国の為に尽すのだ。戦争に行つて空中戦したり空襲したりして敵をやっつけるんだよ」(中略)

「それで敵をやっつけて明さん達も国を作るの？」と、アルミスは遽に一層の親愛感を感じながら言つた。(中略)「だつてさうだらう。敵をやっつけば色々なものを獲ることが出来るだらう」

「日本人はね、みんな、天皇陛下の為に戦争をするんだよ。兵隊さんは、天皇陛下万歳って死ぬんだぜ。僕たちは日本の国の子なんだからね、天子様の子なんだよ。」

「哥薩克だつて哥薩克万歳って死ぬよ」

「へーん。そんなのおかしいよ。君だつて今は満洲国に住んでゐるんだらう、そんなら君も満洲国の子供だらう。さうだつたら満洲国皇帝陛下万歳って死ぬんだよ」(318～319頁)

この会話から分かるように、アルミスはこの時点ではまだ伝統的なコサックとしての意識が強く、「満洲国」のコサックたちを集め、ソ連に攻め入り、新しい国を作り、収奪を行うという、つまりコサックが統治する国だけを想像していたのだ。ここで、子供の会話という形で、アルミスのコサック的思考は初めて、明さんの発言に表された日本の天皇主義的・軍国主義的思想にぶつかった。そのぶつかりからは幾つかのことが示唆されている。まず、騎馬戦はコサックの伝統だが今では時代に遅れている。飛行機や戦車などの新しい技術を取り入れ戦い方を切り替えなければならぬ。そして、昔から帝政ロシアに尽くしてきたが、祖国なき今、コサックは誰のために忠誠を捧げるべきかは問い直されなければならない。最後に、日本人は皆天皇の子だから、コサックも「満洲国」に住んでいる以上、「満洲国皇帝陛下」の子でいるつもりでなければならない。

アルミス少年はこの難しい会話に困惑しつつも、ある種の感銘を受ける。「自分達に比べて、極めてはつきりした心構へと未来とを持つている」(320頁) 明さんの話から、アルミスは自分の焦燥感、つまり養父母との溝、そして白系ロシア

人としての帰属意識の欠如を解消するための手がかりを垣間見たのである。

それから新学期に入り、露西亞人国民学校では白系ロシア人のエレザベータ先生による合唱の授業が始まった。生徒たちが歌う古いロシアの童謡には、「子供はみな神がくれました」という一節がある。その意味を考え出すと、「アルマイスの心の奥底に何時もひそんでゐる（中略）生みの母親と今の母親とへの去就の感情」（325頁）が刺激される。それはもちろん、愛するヴァレンチーラ夫人が生みの母親でないことをどう受け止めるかについて、アルマイスは心の奥底で悩んでいるからである。加えて、アイデンティティ確立の第一段階—アルメニア人から「コサックの子」へ—において、「母」ではなく「父」の方を選んだことへの気付きもあるからと思われる。やはり「コサックの子」とどまっては、アルマイスのアイデンティティは不完全のままだということが示唆される。そこで、明さんの言う「日本の国の子、天子様の子」と同じ仕組みで、「神」という超越的存在を借りれば、「母」の問題も解決できるはずである。それなら、自分たち白系ロシア人の神様は誰だろうと、アルマイスは先生に聞く。すると先生はこう答える。

私達は、今は満洲国で皇帝陛下の御恵みによつて日々安楽に暮すことが出来てゐるのです。そして満洲国は日本と兄弟の間柄にあります。私達は基督を私達の民族を生み育てた神様として仰ぎますがそれより以上に今は、満洲国皇帝陛下に、それから日本に感謝してこの平和の御恵みに報ひなければなりません。（中略）皆さんの本当の父親は満洲国皇帝陛下で母親は満洲のこの国土であると考へばよいと思ひます。このやうな本当の両親共に揃つて私達は完全な一個の人間であり得るのです。（329～331頁）

「本当の父親は満洲国皇帝陛下で母親は満洲のこの国土」というエレザベータ先生の奇妙な理屈は、当時の日本の天皇を国家の家長に見立てる国家観に通底する。この理屈で、アルマイスは「自分にも、本当とか嘘とかいふ以上の、大きな父親があり母親があるのだ」（331頁）と安堵し、養父母との問題も一応解決された。さらに、「本当の両親」の確立により、アルマイスのアイデンティティも「コサックの子」から「満洲国の子供」へとシフトする。コサックが「満洲国」から親同然の恩恵を受けている以上、「満洲国」のために団結して尽力しなければならないという論理である。

物語の最後に、もう戦う意志がなくなつただけ平和に余生を送りたいヴァシリィと、召

集を受けた山田さんとは同じ日に同じ汽車に乗り満洲里を発とうとする。この対照的な両者の中に、アルマイスは後者の見送りを選んだ。別れ際に、少年は山田さんにこう諭される。

「君は山で哥薩克の子だと言つてるね」と、山田さんは彼の肩に片手を置き引き寄せるやうにして言つた「しつかりやり給へ、若者がはつきりした目標を持つて大いに努力することは一番よいことだ。そして君も満洲国に生れ満洲国に育つた人間である以上、満洲国の為に死ぬことを忘れないでね。その意味わかるかね。そしてこれからは、いくら哥薩克でも唯山や野を馬で走つて戦うだけでは駄目なんだよ。うんと勉強して新しい哥薩克にならなければね。騎馬で小銃を持つてゐるだけでは戦車にも飛行機にも敵ひやしない。解るかね。(中略)そして明さんに色々と教へて貰うんだ。君達は今にみんな一緒に亜細亜の為に働くんだからな」(344～345頁)

なぜ、アルマイスは日本人の明さんに色々と教えてもらわなければならないのか。その背後には、当時日本が唱えていた「大東亜共栄圏」思想が潜んでいる。「大東亜共栄圏」思想は日本帝国主義のアジア進出とともに抬頭し、特に1931年9月の満洲事変を契機に、従来の英米との協調を捨て、日本でアジアを主導するような考えが徐々に広まる¹⁶⁾。1940年7月26日、第二次近衛文磨内閣は「基本国策要綱」を議決し、日本を中核として日満支の連携を基盤とした「大東亜新秩序」を建設するとしていた。同年8月1日、松岡洋右外相はこの要綱について、「当面の外交方針は大東亜共栄圏の確立を図ること」と説明し、その範囲を「広く蘭印、仏印等の南方諸地域を包含し、日満支三国はその一環である」とした。これが「大東亜共栄圏」という言葉の初登場であると指摘されている¹⁷⁾。そして、1943年11月5日と6日には、アジア地域の首脳を集めた大東亜会議が東京で開催され、そこで「大東亜共同宣言」が採択された。作成の当初から、政府内で英米を含む諸国の批判を免れようとする動きはあるものの、採決されたその宣言の文面には依然として日本の指導を含むと解釈された用語が使われていた¹⁸⁾。それだけ日本のアジアにおける指導的地位を不動のものとする思想が根強いと思われる。従って、アルマイスが指導民族の日本人の明さんから学ばなければならないのも、「大東亜共栄圏」思想が働いているからである。

このように、アルマイスは明さん、エレザベータ先生、山田さんの三人からアイ

デンティティの確立についてのヒントやアドバイスももらった。まずは日本の国家主義・天皇崇拜から感銘を受け、問題解決の糸口を掴む。それから、日本の国家主義・天皇崇拜の理論を「満洲国」に適用することで、「本当の父親と母親」という問題が解消される。最後は日本人を指導者に置いた「大東亜共栄圏」思想に傾倒し、民族の壁を越えて周りの見送りの人と一緒に日本語で「万歳！」を叫ぶことにより、その「満洲国のための新しいコサック」というアイデンティティの確立はついに完成されたのである。以上から分かるように、アルミス少年を意図的に日本のアジア支配の体制に取り込むという本作品の濃厚な国策色は明白である。

「新しいコサック」とは、騎馬戦など時代遅れの伝統を捨て、戦車や戦闘機などの新技術を身に付ける、より強大な軍事力にほかならない。そして「満洲国」に留まらず、「亜細亜の為に働く」という山田さんの発言からも分かるように、かつて帝政ロシアの領土拡張のための先兵として戦ってきたコサックは、今度は「満洲国」のために忠誠を捧げ、命をかけるように求められるのだ。

3. 求められた「新しいコサック」という虚像

繰り返しになるが、アルミスにとって、自身のアイデンティティが「コサックの子」だけでは不十分である。養父母との衝突や白系ロシア人たちの結束の無さ、これらのアルミスの「焦燥」の根源を解消するために、作品内で提示された解決法がある。つまり、日本人の天皇崇拜にならって、「満洲国」やその「国土」といった個人や民族を超越する大きく曖昧な存在を「本当の両親」とし、「満洲国のための新しいコサック」になることである。この解決法は強引であり、どれほどの実用性があるか疑わしいものである。その疑わしさについて、本章は作品内外という二つの側面から検討する。

3.1 日満当局とコサックとの同床異夢

そもそも、なぜ本作品はアルミス少年を「満洲国のための新しいコサック」に仕立て上げるのか。言い換えれば、何故「満洲国」、あるいはその実質上の支配者である日本は、「新しいコサック」を必要としていたのか。これらの問題を明らかにするためには、またその時代背景に目を向けなければならない。

先述したように、ロシア革命の際にコサックの多くは反革命側として戦った。敗れた後、かなりの部分は満洲に亡命した。例えば、民間人を含めて7千人に達した

シベリア軍団のコサックたちは主に、1924年前後に北満洲と三河地方¹⁹⁾に移住した。三河地方は「満洲国」内最大のコサック集住地となり、1936年に約6300人のロシア人が住んでいて、その相当な部分がコサックであったという²⁰⁾。1945年のデータによれば、三河地方のロシア人の人口は1万1千人から2万5千人となっていた²¹⁾。もちろん、その全員が高い軍事的能力を有していたわけではないだろうが、数多くのコサックがソ連との国境近くに住んでいたという事実は、対ソ対策の面において無視できない。

そもそも、日本の陸軍と関東軍が「満洲国」建国を敢行したのは、対ソ戦略拠点としての満蒙地域の確保が目的の一つであった。しかし、建国後の国防を実質的に担った関東軍は、否応なしに長大な国境線をはさんだソ連との絶えない国境紛争に悩まされる²²⁾。実際、満ソの辺境には紛争事件が多く、件数が最も多かった1939年は総計195件に達し、二日に一回という頻度だったという²³⁾。

加えて、作品内でもキーワードとなっている1941年6月の独ソ戦の影響で、満ソ辺境の緊張は一気に高まった。7月2日、日本軍大本営は満ソ国境に兵力を集結し、関特演（関東軍特別大演習）を行い、対ソ作戦準備に取り掛かっていた²⁴⁾。日満当局にとって、国境地帯のコサックを懐柔することは国内の治安のためにも、国境防衛のためにも望ましいことであったに違いない。このような背景のもとで、当のコサックが自発的に「満洲国」に愛国心を抱き、日本の「大東亜共栄圏」思想を受け入れるというような、国策文学『哥薩克』は書かれたのである。

コサック側から言っても、ソ連政権の転覆や自身の特権身分の維持拡大のためには、やはり「満洲国」及びその背後の関東軍に頼らざるをえない²⁵⁾。しかし、実際コサックが従順に日満当局の支配を受け入れたわけでもなく、両者の間には始終猜疑と不信が存在した。例えば、1936年6月初めに、通ソ抗日満の疑いで、関東軍は三河地方の主要部落を制圧し、30名越えの白系ロシア人を検挙し、その中の15名は死刑で他は10年以上の懲役を課せられた。また、「満洲国」軍の一部として、コサックを含む白系ロシア青年からなる騎兵部隊（通称浅野部隊）が編成され、謀略、情報、宣伝部隊としての教育訓練が実施されていた²⁶⁾。しかし、「満洲国」が崩壊しても、関東軍に信用されなかったその部隊は、ほとんど利用されることなく終わったという²⁷⁾。それどころか、敗戦の年の8月、1936年の事件と同じく通ソの容疑で、浅野部隊のハイラル隊の白系ロシア人隊長が日本軍によって処刑された。ほかの白系ロシア人はどちらの事件も冤罪だと主張していたという²⁸⁾。

以上のように、コサックと日満当局との間には利用関係はあったものの、信頼は

なかった。白系ロシア人の結束を願うアルマイスの思いは当局にとって都合のいいものであり、「満洲国のための新しいコサック」も、結局は帝国日本の国益のために作り上げられた虚像にすぎないのである。

3.2 民族差別の現実と帝国イデオロギーの陶酔

満洲里の白系ロシア人社会におけるヒエラルキーの片鱗は、すでに言及したアルマイスが感じていたアルメニア人としての劣等感からもうかがえる。実は白系ロシア人社会に限らず、作品内では町の住民全体のヒエラルキーが描かれている。

例えば、アルマイスの友達にニーナという、ロシア人と中国人のハーフの少女がいる。その母親は「露西亞人のくせに満人に嫁いでゐるなんて」(72頁)とヴァレンチーラ夫人から揶揄される。その中国人の父親に対して、アルマイスは「ニーナ達のパパは満人だから少し厭らしい」(44頁)と見下す。また、そのニーナも、満洲里を逃げ出したヴァシリィのことを、「アルメニヤ人は猶太人の次ぎだからね」(346頁)と軽蔑する。そして、「町の恵まれた階級に属する露西亞人」(220頁)ではあるが、さらにその上があって、「この町で日本人は一等上層階級だし露西亞人に比べれば金廻りもずつといい」(210頁)という。それは少年のアルマイスでさえ感じ取れるほどだ。

「ママ。偉い人って何？ 僕も勉強すれば明さんのお父さんのやうに偉い人になれるの？ …日本人でなければなれないのぢやないの」

「いゝえそんなことはない、誰だつて勉強さへすれば、いくらでも偉い人になれます」と、彼女は強く極め付けはしたものゝ、それ程の自信もないのだつた。(199頁)

ここには、「日本人>ロシア人>アルメニア人>猶太人、満人(中国人)」という歴然としたヒエラルキーが存在する。民族差別の被害者だったはずのアルマイスが、中国人を見下しているように、差別の問題は根深いものである。民族差別を描写し得たのは、作者の檜山陸郎に「外地」育ちの経験や、「満洲国」で一年近くの滞在歴があるからだと思われる。加えて、日本人をアジアの指導者とする「大東亜共栄圏」思想などの帝国イデオロギーを当たり前のように、無批判に受け入れている。その結果、本作品は「満洲国」の生々しい民族差別の実情をある程度捉えているといえる。

繰り返しになるが、小説の最後、町の人々が召集を受けた山田さんの見送りをす

るシーンがある。日本人のほかに、アルミスはもちろん、ヴァレンチーラ夫人、ニーナ、アルミスの友人である中国人の子供たちなどもいて、共にクライマックスを迎える。列車に乗り込み、デッキの上に現る山田さんの姿に対し、アルミス少年はこのように奇妙な感情を抱く。

今山田さんの姿から受ける厳しさには、同じく威圧されても反発の感情が起らないばかりでなく、偉大な立派なものに屈服される快感に全身しびれるやうな状態で寧ろ何時までも仰ぎ見てゐたい欲望と憧憬を胸一杯に感ずるのであつた。(348頁)

アルミスだけではない。その場にいた他民族の人たちも山田さんの「立派」さにひどく感動する。

同じ一つの「万歳」といふ叫び、それは同じ一つの祈りの言葉であるかのやうに同じ一つの点一頂上であり理想であり光であるものに向つてどよもして集中されてゆく。それは言葉の異なるなどといふのは勿論、肌の色、眼の色の異なるなど、凡ゆる彼等の民族と民族との障壁を吹き飛ばし、五臓六腑を一しょくたにして、大きな宇宙の掌に抱きこまれてゆくやうな陶酔と神秘的な響で魂を奪ひ去るのであつた。(349頁)

前述した民族格差・民族差別の問題は何一つ解決されていない。これらは決して、簡単に吹き飛ばされるような障壁ではないはずだ。にもかかわらず、作品は「大東亜共栄圏」思想が代表する帝国イデオロギーの、作中人物にもたらした狂気じみた「陶酔」でごまかしそうとする。アルミスが帝国イデオロギーへの傾倒あるいは陶酔だけで、「満洲国」のために死も辞さない「新しいコサック」になろうとするのは、ご都合主義な展開と言わざるをえない。強いて言うならば、日本が一番強いから日本側につきたいといった方が、「偉大な立派なものに屈服され」たい、強者崇拜の彼らしい一貫性がある、より自然と言えよう。

おわりに

本論は主人公のアルミス少年のアイデンティティの確立過程を辿ってきた。

アルミスはアルメニア人から「コサックの子」を経て、最後は「満洲国」の建国精神や、「大東亜共栄圏」思想などに感化され、「満洲国」や日本のために戦う「新しいコサック」として目覚める。その背後には、日満当局が「満洲国」のコサックを戦時体制に取り込み、延いてはアジア支配の手駒として利用するという政治的意図に寄り添う姿勢が潜んでいる。本作品は決して「あまり政治性のない文学作品」ではない。

実際、当時のコサックと日満当局との間に信頼関係はなく、互いに向けた猜疑心は終戦まで続いた。アルミスの「満洲国」への服従も、帝国日本の天皇主義や「大東亜共栄圏」思想への傾倒というよりは、国境の複雑な環境において、エミгранトとして強者の側につきたいという自然な願望から来たものと読むことができる。また、「みんな一緒に亜細亜の為に働くんだ」と訴えておきながら、作中には根深い民族差別が散りばめられていて、未解決のままに取り残されている。こうした「満洲国」の現実をある程度忠実に描いたことは本作品の評価すべき点だ。また、複雑な立場にあったアルメニア人という珍しい題材を取り上げ、民族間の軋轢やその狭間に置かれた個人の葛藤を描いたことは、今日においても示唆に富む。しかし、これらの現実と、作品が強引に回収していく帝国イデオロギーとの間にはズレが存在する。本作品が日本をアジアの頂点に据えた帝国イデオロギーに無批判に迎合すればするほど、これらの現実とは赤裸々な矛盾と転じ、帝国イデオロギーに破綻をきたすのである。

注

- 1) 旧名はモダン日本社。1931年10月に文藝春秋社より創刊された大衆娯楽雑誌『モダン日本』から始まり、翌年の1月号からは朝鮮人の馬海松の単独経営となった。戦争末期に『新太陽』と改題したが、娯楽誌としての性格は一貫していたという(高崎隆治『戦時下の雑誌—その光と影』風媒社、1976年12月、148～149頁)。文藝春秋社と菊池寛の戦争協力に関しては鈴木貞美氏の『『文藝春秋』の戦争—戦前期リベラリズムの帰趨』(筑摩書房、2016年4月)を参照されたい。
- 2) 『文藝春秋』20巻11号、1942年11月。「満洲国」西北部のホロンバイル地方で鯉魚の養殖業に関わる日本人たちの奮戦苦闘を描いた。
- 3) 中曾根松衛「音楽界戦後50年の歩み 人物楽壇史38 檜山陸郎」『音楽現代』30巻6月号、2000年6月、116～117頁
- 4) 川村湊「檜山陸郎『哥薩克』解説」『日本植民地文学精選集026・満洲編12・

- 哥薩克』ゆまに書房、2001年9月、3頁
- 5) 『日本読書新聞』1943年9月25日
 - 6) 伊賀上菜穂「日本人が見た三河コサック村——一九三〇年代～一九四五年」『満洲国におけるロシア人の社会と生活』ミネルヴァ書房、2013年8月、174頁
 - 7) 同4、5頁
 - 8) 外川継男「コサック」『日本大百科全書・9』相賀徹夫編、小学館、1986年、267～268頁
 - 9) 同6、159頁
 - 10) 阪本秀昭「序章 満洲国建国時のロシア人の動向」『満洲国におけるロシア人の社会と生活』ミネルヴァ書房、2013年8月、2頁
 - 11) 護雅夫「タートル人」『日本大百科全書・14』相賀徹夫編、小学館、1987年、753頁
 - 12) 木村英亮「アルメニア」『日本大百科全書・1』相賀徹夫編、小学館、1984年、835頁
 - 13) ポダルコ・ピョートル「エミグラント（亡命者）の登場」『白系ロシア人とニッポン』成文社、2010年7月、13頁
 - 14) 生田美智子『満洲の中のロシア——境界の流動性と人的ネットワーク』成文社、2012年4月、3～4頁
 - 15) 当時、ソ連人はしばしば「赤系露人」と、「白系ロシア人」と相対する呼称で呼ばれていた。つまり、ソ連人も広義的にはロシア人として見なされていた。本作品においてもこのような認識があり、「ロシア人」の定義は文脈によって変わってくる。よって、本稿も厳密な定義に統一せず、文脈に応じて説明を加えることにとどまる。
 - 16) 安達宏昭『大東亜共栄圏』中公新書、2022年7月、11頁
 - 17) 同上、32～33頁
 - 18) 同16、153頁
 - 19) 現・内モンゴル自治区北部の都市、ハイラルより北の地域指す。根河、根爾布爾河、哈烏爾河という三本の河川の流域にあることから、三河地方と呼ばれていた。満洲里の町とそれほど離れておらず、同じく「満洲国」の北西部の国境地帯に位置する。
 - 20) 同6、160頁
 - 21) ユーリア・アルグジャーエヴァ「ロシア側資料に見る三河コサック村の生活」『満

- 洲国におけるロシア人の社会と生活』ミネルヴァ書房、2013年8月、185頁
- 22) 山室信一『キメラ—満洲国の肖像』中央公論新社、2007年10月、47頁
- 23) 満洲国史編纂刊行会『満洲国史・各論』財団法人満蒙同胞援護会、1971年1月、354～355頁
- 24) 満洲国史編纂刊行会『満洲国史・総論』財団法人満蒙同胞援護会、1970年6月、631頁
- 25) 同10、3頁
- 26) 同23、1248頁
- 27) 阪本秀昭「地方の白系露人事務局の活動」『満洲国におけるロシア人の社会と生活』ミネルヴァ書房、2013年8月、65頁
- 28) 同23、1248頁

※本文の引用は、復刻版の『日本植民地文学精選集026・満洲編12・哥薩克』（ゆまに書房、2001年9月）に拠った。

(こう じん / 本学大学院生)